

ことわざ

和田 奈良子

光太は小学校六年生、慎二は三年生になる。二人は、最近ことわざに凝っている。

「ばあちゃん、ことわざたくさん知っている」

「あまり知らないわねえ」

「教えてあげる。井の中のかわず。これは、はなれ小島のチャンピオンというんだ。自分が一番つよいと思つておるとよ。世の中のことを知らん人のこと。親のこころ子しらず。これは親の気もちは、大人になつたらわかるつてこと。うそから出たまこと。うそも方便。ええと、一を聞いて十を知る。これボクみたい。仏の顔が三つ」

「それ、仏の顔も三度つて言うんじゃない」

「なんだ、ばあちゃんも知つてるじゃんか。じゃ、猿も木から落ちるは」

この孫たちが、春休みには糸島の芥屋の家で魚釣りをするのを楽しみにしていた。しかし、孫たちにもそれぞれの都合があつて、出掛けたのは小雨の降る、もう休みも残り少ない日だった。芥屋に着いて昼食を済ませると、福吉と深江という場所に、釣り場の様子を見に行つた。夫の後ろを、孫二人が恐れ気もなく岩場を歩く。つるつといきそうので、私は怯む。もう少し雨が降つたら滑るだろう。ハラハラしながら眺める。

釣り場の様子見からの帰りの車の中で、「明日は雨が降つたら止めにしようか。岩が滑り落ちそうで怖いから」と言うと、光太が「じいちゃん雨具持つて来たんだよ」と、どうでも行く気である。慎二も「こけつに入らずんば、こじをえずだよ。ねえ、じいちゃん、少しぐらい冒険しないと魚は釣れんよね」と威張つて言う。

翌朝、三人は小雨の中を早くから出掛けた。出がけに、門のところで光太が振り返つて言つた。

「ばあちゃん、今夜のおかず、新しい魚だよ」

「そんなの、とらぬ狸の皮ざんようと言うんだ」弟からやり込められた。

雨は止みそうになかつた。昼少し前に、車は戻つて来た。

「釣れた、釣れた」

まだまだ釣れそうだったが、風邪を引くといけないからと、切り上げたのだという。コノシロ十三尾の収穫だった。海の色がそのまま上がってきたのかと思うほどの、新鮮な輝きと香りがあつた。

夫が二尾を酢物にした。酢を入れると、魚はいっそう輝きを増した。残りは背開きにして、中に刻み葱と味噌を入れて焼いた。

出来上がったので食卓に並べると、先ほどまで輝いていた魚は、薄汚れた色に変わつてくる。「どうしたんだろう、これ。おじいちゃんでしょう、酢をまた加えたのは」色も味覚のうちなのに。少し不機嫌になった私の顔を見て、慎二がすり寄つて来た。

「すぎたるはおよばざるがごとし、でしょう」「うーん、亭主の好きな赤烏帽子か」「どういうこと」「大人のことわざよ」「ふーん、大人のことわざつて、どんなのがあるの」「後で教えてあげる」

食事の後は風呂。やれやれと思つた途端に、兄弟喧嘩が始まつた。テレビのプロレスの

恰好を真似て、弟を締めあげる。

「それは駄目でしょう」割って入る。

「ばあちゃん、お兄ちゃんはたった三年早く生まれただけで、どうしてご主人様なの。ボクのこと、家来だつて言うんだ」

「光太、どうして弟をいじめるの」

「ずるいよばあちゃん、喧嘩両成敗だろう。いつもぼくばかり怒ってる」

二泊すると、私の方が疲れる。雨の休みは忙しく過ぎ、翌朝は目映いばかりに晴れた。

「今度来るのは、五月の連休だからね。ところでお母さん、待ってるだろうかね。どこか羽根伸ばして、出てっけないだろうか」

あくる日、娘がやって来た。

「お母さん、子供たちに変なこと教えないでよ」

「なんだろう」

「慎二が言うのよ。金の切れ目が縁の切れ目、だつて。お金がなくなったら、大人は別れるっちゃう、と。それで、私たちはいつか離婚するのって聞くのよ」

はて、何の話からそうなったのやら、と今度は真剣に考え込んでしまう羽目になった。

(付記)

作者は、平成十七年十二月没(八十一歳)